

(第二十四章)

それに対する反論を斥ける>真実を考察する>章の著述を説く>反論>起壊等が不合理であるという反論>

[四聖諦の修行対象と修行行為が不合理であるという反論]

ここで言う。

「もし、これら全てが空であるならば、
起こることは無く、壊れることは無い。
聖なる四つの真実¹が、
君には無い背理となる。 1
聖なる四諦が無いので、
尽く知られることや捨て去られることや、
修されることや実現されることは、
合理となるのではない。 2

起壊等が不合理であるという反論> [向と果が不合理であるという反論]

それらが有るのではないので、
四果²も有るのではない。
果が無ければ、果に住する者も無い。
向かう者達も有るのではない。 3

起壊等が不合理であるという反論> [三宝が不合理であるという反論]

もし、八種のプトガラである士夫、
それらが無ければ僧伽は無い。
優れた諸諦が無い故に、
聖なる法も有るのではない。 4
諸法、僧伽が有るのでなければ、
仏陀が如何様に有るとなろうか。
そのように語るならば、
三宝に害を為すのである。 5

1 聖なる四つの真実：四聖諦。苦諦（苦しみの真実）・集諦（苦しみの原因の真実）・滅諦（苦しみとその原因が滅した真実）・道諦（滅諦を得る為の修行道の真実）の四。

2 四果：声聞聖者の四種の修行の果。

もし、これらの衆生が全て空であるならば、それ故に起こることは無く、壊れることは無い。それらが無いので、聖なる四つの諸眞実が、君には無い背理となるだろう。四聖諦が無いので、苦が尽く知られることと、集が捨て去られることと、道が修されることと、滅が実現されることは、合理となるのではない。

それら、苦が尽く知られることと、集が捨て去られることと、道が修されることと、滅が実現されることとが有るのではないので、善行の四果も有るのではない。善行の果が無ければ、果に住す者と向かう者であるそれら八種のプトガラ³も有るのではない。

もしそれら八種のプトガラである士夫が無ければ僧伽は無く、また他にも聖なる諸諦が無い故に、聖なる法も有るのではない。聖なる法と僧伽が有るのとなければ、仏陀が如何様に有るとなろうか。その言葉で空性であると語るならば、三宝を害するのである。

反論> [業の因果等が不合理であるという反論]

また他にも、

空性は、果が有ることと、
 非法と法性と、
 世間人の名称の
 全てに害を為すのである。 6

空性を保持するならば、非法と法そのものと、それらによって為された果が

³ 八種のプトガラ：四向四果の、八種の修行道の何れかを具える者。

四果は声聞聖者の四種の修行の果。四向は、果を得る為に実践に向かう四種の修行道。

預流果：四果の一。声聞の第一の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の荒い煩惱を捨て去るまでの声聞聖者の修行果。

一來果：四果の一。声聞の第二の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の殆どの煩惱を捨て去り、来生に欲界の生を一度経過して阿羅漢果を得るだろう声聞聖者の修行果。

不還果：四果の一。声聞の第三の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の煩惱を捨て去り、来生に欲界の生を受けずに阿羅漢果を得るだろう声聞聖者の修行果。

阿羅漢果：阿羅漢果。四果の一。声聞の第四の果。見所断・修所断（見道・修道で捨て去るべきもの）を捨て去り、解脱を得た声聞聖者の修行果。

有ることと、世間人の名称全にも害を為すものであるので、そう見れば、一切事物は空ではない。

章の著述を説く>それへの返答>他派の言説は縁起の真如を了解していない反論であると示す>他派が挙げた過失は自派に当てはまらないさま>論難が当たらない理由> [三義を了解していない反論であると示す]

そこで説く。君は、
空性の必要性と、空性と、
空性の意味を了解していないので、
それ故に、そのように批判するのだ。 7

君は、空性が示された必要性であるものと、空性の定義であるものと、空性の意味であるそれらを正しく如実に了解していない故に、そのように批判するのだ。

論難が当たらない理由>そのような反論が(対論者は)二諦を了解していないと示す> [了解されていない二諦の本質]

諸仏が法を示されたことは、
二諦に正しく依拠している。
世間の世俗の真実(諦)と、
聖なる勝義の真実(諦)である。 8

そのような反論が(対論者は)二諦を了解していないと示す> [二諦を知らねば善説の真如を知らぬ]

その二諦の、
分類を良く知らぬ者、
彼らは仏法の、
深甚なる真如を全く知らない。 9

仏陀仏世尊方が法を示されたことはこれらの二諦に依拠して起こり、「世間の世俗の諦」とは、自性が欠如する諸法(現象)において、世間が誤りを了解していないことによって、一切法(現象)は生じると見るものであり、それはまさしくそれらにとって世俗としてまさしく真実であるので、世俗の諦である。

「勝義の諦」とは、聖者方が誤りであるのご理解されたことによって、一切法(現象)は生じることは無いとご覧になるものであり、それはまさしくそれらの方々にとって勝義として真実そのものであるので、勝義の諦である。

そこで、その二つの世俗諦と勝義諦の分類をよく知らぬ者は、仏陀の深甚な教えの真如をよく知らぬのである。

そのような反論が（対論者は）二諦を了解していないと示す＞ [二諦が示された必要性]

ここで、こう『言いたい意味が〈一切法（現象）は生じることが無い〉という勝義諦そのものであるならば、この第二の世俗諦は何故必要か？』と思えば。

それに説こう。

世俗名称に依拠しておらず、
聖なる義は示されることができない。
聖なる義に依拠しておらず、
涅槃を得るとはならない。 10

何故ならば、世俗名称に依拠しておらずに勝義が示されることは適わず、何故ならば、勝義に依拠しておらずに涅槃が得られるとはならない故に、二諦とも名称付けられなければならない。

そのような反論が（対論者は）二諦を了解していないと示す＞ [二諦を誤って捉える過失]

空性について見解を間違えば、
智慧の弱い者達は破滅する。
斯くも、間違った蛇の掴み方や、
明呪が間違っただけで成就されるが如くである。 11

勝義である空性について見解を誤れば、弱い智慧を具える者を破滅させ、彼に大変な害をもたらすことになる。斯くも、例えば蛇に対して持ち方を誤れば酷いことになり、その者に死に係わる大きな危険を生じさせることや、斯くも、例えば明呪や真言の行じ方と儀軌が衰えたことによって成就を誤ったならば、破滅を招き、その者に命に係わる大きな危害を生じさせるが如くである。

そのような反論が（対論者は）二諦を了解していないと示す＞

[二諦は了解し難いので、教示者が最初に説かれていないさま]

それ故に弱き者がこの法の、
底を悟ることは難しいとご存知になり、

成道者の御心は、法を教示することより、
良く退いたのである。 12

その因（理由）のみの故に、知慧の弱い者達がこの法の奥底をまさしく了解し難いにご存知になって、世尊の御心は法を示すことより良く退かれたのである。

他派が挙げた過失は自派に当てはまらないさま > [論難が当たらないと示す本論]

君が、私に対して空性を、
過失として背理にすることによって、
捨てさせるものは、
それは空に当たらない。 13

君が私に対して、空性が過失として背理になることによって捨てさせるものは、自性が欠如するものにおいて不合理である。

他派が挙げた過失は自派に当てはまらないさま > [過失が無いだけでなく、良質があるさま]

また他にも、

空性が適うものは、
それにおいて一切が適うとなる。

他派の言説は縁起の真如を了解していない反論であると示す > 過失を挙げた者自身にその過失が当てはまるさま >

[過失の提示者にその過失が当たる理由]

空性が適わぬものは、
それにおいて一切が適うとならぬ。 14

それにおいて自性がまさしく欠如すると適うものに、世間と出世間の一切が適うとなるだろう。それにおいて自性がまさしく欠如すると適わぬものに、世間と出世間の一切が適わぬとなるだろう。

過失を挙げた者自身にその過失が当てはまるさま > [それによって、自らの過失を他派の過失であると捉えた方法]

まさしく君は自らの諸々の過失を、

私に尽く転嫁する。
馬に実際乗りながら、
馬そのものを忘れてしまったかの如く。 15

まさしく君が自らの諸々の過失を私に尽く転嫁させることは、馬に実際に乗りながら、馬そのものを忘れてしまったかの如くである。

過失を挙げた者自身にその過失が当てはまるさま> [それらの過失が何であるか明らかに示す]

また他にも、

もし、諸事物が事物そのものより
有ると随見するならば、
そう見るのであれば、諸事物は、
因縁が無いと君は見るのだ。 16
果と因そのものや、
行為者と行為するものと行為対象や、
生と滅や、
果へも害を為す。 17

もし、諸事物は自性に有ると随見するならば、そう見れば君は、諸事物は因縁が無いと見るのである。然れば、果と因そのものや、行為者と行為するものと行為対象や、生と滅や、果についても害を為すのである。

それへの返答> [自派の承認は、空の意味は縁起の意味であると示す]

依拠し関係して起こるのであるものは、
それは空性であると説かれる。
それは依拠して名付けられるもので、
まさしくそれが中の道である。 18
何故ならば、縁起生ではない
法（現象）は何も有るのではない。
それ故に、空ではない
法（現象）は何も有るのではない。 19

吾輩は、依拠し関係して起こる（縁起生である）ものは空性であると説き、それは依拠して名付けられるものであり、まさしくそれが中の道である。そこ

で、何らかの事物がまさしく有るならば、それは依拠して起こることと、依拠して名付けられるものであるので、何故ならば縁起生でない法（現象）は何も有るのではない故に、空でない法（現象）は何も有るのではない。

それへの返答>そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [所知である四諦が適わない]

もし、この全てが空でないならば、
起こることは無く、壊れることは無い。
聖なる四つの真実ともが、
君には無い背理となる。 20

もし、この衆生全てが空でないならば、それ故に起こること無く壊れることは無い。それらは無い故に、聖なる四つの真実ともが、君には無い背理となるだろう。

もし、「如何様に」といえば。

説く。

縁起生でなければ、
苦があると何処でなろうか。
無常や苦を説かれたことは、
自性より有るのではない。 21

縁起生でなければ、苦が有るとはならない。何故かといえば、諸経部より
「無常とは苦しみである。」
と説かれたことは、自性より有るのではない故である。
また他にも、

自性より有るのでなければ、
何が全く起こるとなろうか。
それ故に空性を害するものには、
集（苦が全く起こること）は有るのではない。 22

その苦しみが自性より有るのでなければ、何が全く起こるとなろうか。（何故ならば）自性より有る故である。何故ならばそのようである故に、空性を害す

るものに集（苦が全く起こること）は無い。

自性が有る苦に、
滅は有るのではない。
自性とは尽く留まる故に、
滅に害を為すのである。 23

自性として有る苦に滅は有るのではない。（何故ならば）壊れぬ故である。然れば、自性が尽く留まる故に、滅に害を為すのである。

道は自性が有るならば、
修されることは合理にはならない。
もし、その道が修されるものであれば、
君の事物そのものは有るのではない。 24

道は自性が有ると捉えるならば、修されることは合理にはならない。（何故ならば）まさしく無意味である故である。このように、恒常であるものに修され成就する方法は無いので、それ故に道が修されることは合理にはならない。もし、道が修されるものであるならば、君の自性は有るのではない。

また他にも、

ある時、苦と集と、
滅が有るのでなければ、
道の「苦の断滅」とは、
何が得られるだろうと主張するのか。 25

苦と集と滅の三つとも法が有るのではない時、君の、苦が断滅する何が、道によって得られるだろうと主張するのか。

そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [四諦の智等と四果が適わない]

また他にも、

もし、自性として、
遍く知るのでなければ、
それは如何様に遍智となろうか。
事物そのものが留まることを知るのではないのか？ 26

もし、苦であるものを自性として遍く知るのでなければ、それは如何様に遍智され得ようか。(何故ならば) 自性として尽く知られていない故である。君の「自性として確実に留まるのである」というのではないのか。

その如く、まさしく君の
捨て去られる、実現される、
修される、そして四果⁴も、
遍智の如く適わない。 27

その如く君自身によって、集が捨て去られることと、滅が実現されることと、道が修されることと、四つとも果も、苦の遍智の如く適わない。自性として捨てられていないものであるその集も、捨てられ得ない。(何故ならば) 自性として捨て去られていない故である。自性として実現されていないものであるその滅も、実現され得ない。(何故ならば) 自性として実現されていない故である。自性としてまさしく修習されていないものであるその道も、修習され得ない。(何故ならば) 自性として修習されていない故である。そのようであれば、それら四聖諦は、遍く知られることと、捨て去られることと、実現されることと、修習されることの四つとも不合理である。

また他にも、四果である預流と、一來と、不還と、阿羅漢も、四つの諸々の行為が無いので適わない。

そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [三宝が適わない]

また他にも、

⁴ 四果：修行よって得られる四種の果。預流果・一來果・不還果・阿羅漢果の四。

預流果：四果の一。声聞の第一の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の荒い煩惱を捨て去るまでの声聞聖者の修行果。

一來果：四果の一。声聞の第二の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の殆どの煩惱を捨て去り、来生に欲界の生を一度経過して阿羅漢果を得るだろう声聞聖者の修行果。

不還果：四果の一。声聞の第三の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の煩惱を捨て去り、来生に欲界の生を受けずに阿羅漢果を得るだろう声聞聖者の修行果。

阿羅漢果：四果の一。声聞の第四の果。見所断・修所断（見道・修道で捨て去るべきもの）を捨て去り、解脱を得た声聞聖者の修行果。

自性を尽く保持することによって、
 自性として、
 得たのではないその果を、
 如何様に得ることができるとなろうか。 28

自性を尽く保持することによって、自性として得たのではないものであるそれらの果も、得ることはできなくなるだろう。

果が無ければ果に留まる者は無い。
 (果に) 向かう者達も有るのではない。
 もし、八種のプトガラの上、
 それらが無ければ僧伽は無い。 29

善なる加行の諸果が無ければ、果に留まる者と、(果に) 向かう者である八種のプトガラ達も有るのではない。もし、八種のプトガラであるそれらの士が無ければ僧伽も無い。

また他にも、

聖なる諸諦が無い故に、
 聖なる法も有るのではない。
 法と僧伽が有るのでなければ、
 仏陀が如何様に有るとなろうか。 30

君によって、仏陀は菩提に
 依拠していないという背理にもなる。
 君によって、菩提は仏陀に
 依拠していないという背理にもなる。 31

君の自性によっては、
 仏陀ではないものが、
 菩薩行を、菩提を得る為に
 追求したとしても菩提を得るとはならない。 32

そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [行為者と業果が適わない]

何者も、法と非法を
 いつ時も為すとはならず、
 欠如しないものに何をするのか。

自性において行為は無い。 33
 法と非法の因によって起こった、
 果は君には有るのではない。
 法と非法が無くとも、
 果が君には有るとなる。 34
 法と非法の因によって起こった、
 果がもし君に有るならば、
 法と非法より起こった、
 果が何故空ではないのか。 35

そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [世間の世俗名称が適わない]

世間人の世俗名称の
 全てにも害を為すのである。
 縁起生である
 空性に害を為す。 36
 行為は何も無くなり、
 行為を始めることも無くなる。
 空性に害を為すならば、
 為さずとも為すとなる。 37
 事物そのものが有るならば、諸々の衆生は、
 様々な時点と離れたことになり、
 生まれておらず、滅しておらず、
 永久にも留まることになる。 38

自性が有るのでなければ、余すことない諸々の衆生は、様々な（異なる）時点と離れるとなり、生じておらず、滅しておらず、永久に留まることにもなるだろう。そう見ることから、そのように自性を語ることを尽く保持するならば、斯くも示されたそれら一切の過失としても背理となるだろう。

そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [出世間の名称が適わない]

また他にも、

もし、空が有るのでなければ、
 得ていないものを得ることや、
 苦しみを終わらせ、業と

煩悩の一切を捨て去ることも無い。 39

もし、自性がまさしく欠如するのでなければ、それ故に、得ていないものを得るとなる、それらあらゆる一切の世間と出世間の特性が得られることも無くなるが、苦しみを終わらせる業も無くなり、一切の煩悩を捨て去ることも無くなるだろう。

それへの返答 > [縁起の真如を見れば、四聖諦の真如を見るとなる]

縁起生を
見る者が、苦と、
集と、滅と、
道の、それらそのものを見るのである。 40

縁起生を見る者が、「苦そのもの、集そのもの、滅そのもの、道そのもの」というそれら四法を見るのである。

真実を考察する > [章の名を示す]

「聖なる真実を考察する」という、第二十四章である。